

戸倉旭嶺、伊吹正陽、植村寛水、四明会栗本天芳(敬称略)

(予告)

- △京都琵琶協会三月定例茶話会... △藤波桜華演奏会... △松岡旭岡氏 西宮市二見町十一番十一号

よもやま

(敬称略)

○：新年演奏会 一月十九日午後一時東... 京芝菜根(主催薩摩琵琶正統会)...

春日野一鈴木鶴岡、旅順口一古家絃風、春の調一池野谷吟岫、武蔵野一辻晴剛、旅順開城一鈴木鶴岡、羅生門一前田秋声、古曲門琵琶合奏一有志

○：錦びわば演奏会 一月十九日午前十一時東京新宿朝日生命ホール(主催同会)...

○：河瀬碩水師七回忌追善演奏会 二月一日午後一時大阪大融寺会館(主催一水会大阪支部)...



あき 春三月、冬眠からよりやく醒めて琵琶もそろそろ活動期に入る◎今年暖冬異変が続く京絃社の近くの北野...

昭和四十四年三月一日発行(非売品) 編集者 植村寛水 発行所 京都市北区衣笠西馬場町二九

琵琶 機関紙 京

結

才一七七号

京 絃 社

狂酔亭漫録号外特集

NHKのTV「天と地と」偶感(上)

謙信と信玄の一騎打ち

森 中 義 一



ご紹介。森中氏と私とは明治四十一年大阪府立市岡中学へ入学以来六十一年以上の知り合だが、氏は綿業界一途に進み、現在は某貿易会社の顧問的重役で、壮年期より日本史其他文化史を研究され、本稿は最近日本綿業倶楽部月報に発表されたもので、我等琵琶人には必読の好資料と思ひ、ご本人の承諾を得て転載する次第である。従って今月は拙稿酔亭漫録は休載する。(古谷寛水)

お恥すかしい話ですが、実は私つい先日まで、上杉謙信と武田信玄の川中島の合戦は、一度だけのものと思ひこんでいたのです。ところがNHKの大河ドラマで、謙信の一代記とも言うべき、海音寺潮五郎氏の「天と地と」を放送すると聞いたので、それに関する本を拾い読みしてみますと、川中島の合戦は、一回だけでないようです。しからば何回か、と

一騎打ちは後で書くことにして、いったいこの有名な四回戦はどちらが勝ったのでしょうか。「甲陽軍鑑」は「卯の刻(午前六時)にはじまったるは、大方越後のからち。巳の刻(午前十時)にはじまったるは甲斐のからち」と何気なく読んでみると、五分と五分のように思いますが、こんなペラ雑な話はありません。凡そ勝負ごとは始め勝って居ても、後で負ければ、始めの勝ちなんにもなりません。将棋や囲碁でご経験済みのことと存じます。謙信文庫主任布施秀治氏は、大正六年発行の「上杉謙信伝」において、謙信軍敗退説を否定しておられます。これはお立場上無理のないところですが、しかし謙信勝利とも、書いてありません。この曖昧模糊の合戦成果をハッキリさせたのが新潟大学の井上説夫博士で博士は信玄が後刻部下にたいし、川中島の土

地をポーナスに与えているに反し、謙信は一片の感謝状で勇武を称讃しているのにとどまっています。川中島を放棄し、犀川を渡ったことを指摘して、甲斐軍の勝ちであることをその著「謙信と信玄」昭和三十九年発行に発表していられる。なんと申しました。この合戦の花形は、謙信と信玄の一騎討ちです。私のようにヨボボしている老人でなく、謙信三十三才、信玄四十二才という男盛りのお兄さんの真剣勝負ですから、昔からやかましく言われる筈です。「上杉謙信伝」には

「謙信唯一騎、轟然敵の牙宮に翻って入る。其扮装は、紺糸織の鎧に、萌黄緞子の胸衣を着、金の星兜の上を立烏帽子、白砂の練絹を以て行人つつみになし、二尺四寸五分順慶長光の大刀を抜き放ち、放生月毛の駿足に、其身軽げに打跨りたり」とあって、朗読すると講談そっくりです。謙信は床几に腰をかけていた信玄に斬りかかります。信玄は軍配屈扇で二度まで受けとめました。三の太刀で肩先を斬られます。

この時、中間頭、原大隅守虎吉(徳川時代の「常山記談」と「名将言行録」には、向井与左衛門となっています)は、槍で謙信を突きます。ところが槍がそれて馬の尻にさざります。馬こそ迷惑な話ですが、これには馬も驚きました。こんな無鉄砲な連中とは、おつきあい出来んと、謙信をのせたまま、越後陣地に一目散。実に馬にはお気の毒です。ここでおかしいのは甲斐軍がこの突拍子もない男

切抜帳から (三七)

平井春嶺

○終戦の真相(一五)

九、終戦に対する八月九日

の御前会議の状況と、大御心の有難さ(三)

天皇陛下は少しお体を前にお乗り出しになるような形でお言葉がございました。緊張と

をその時は謙信と思わなかったという事で「後日に至り、敵の主将たる事を知りて皆舌を巻けり」と記してありますが、どうも納得いたしかねます。と申しますのは、行人つつみの事なのです。行人つつみというのは、兜の上から両肩まで白布が垂れている頭巾のようなもので謙信一人だけの独得の装束です。謙信は攻城戦だけでも、生涯七十数回参加したといわれている武将です。したがって行人つつみは相当広告してあることになってい

申してこれ以上の緊張は御座いません。陛下は先づ「それならば自分の意見を云おう」と仰せられて、「自分の意見は外務大臣の意見に同意である」と仰せられました。その一瞬を皆様、御想像下さい。場所は地下十米の防空壕、しかも陛下の御前。静寂と申してこれ以上の静寂を所はございません。陛下のお言葉の終った瞬間、私(追水久常氏以下同じ)は胸がつかまって、涙がはらはらと前に置いてあった書類にしたり落ちました。私の隣りは梅津大将でありましたが、これ又書類の上に涙がにじみしました。私は一瞬各人の涙が書類の上に落ちる音が聞こえたような気がしました。

次の瞬間はすすり泣きであります。そしてその次の瞬間は号泣であります。涙の中に陛下を拝しますと、始めは白い手袋をはめられたまま親指を以てしきりに眼鏡をぬぐって居られました。ついに両方の頬をしきりにお手を以てお拭いになりました。陛下もお泣きになったのであります。建国二千六百年、日本の始めて敗れた日であります。日本の天皇陛下が始めてお泣きになった日であります。あゝ何とも申す言葉がございません。

大東亜戦争が初まってから陸海空のして来たことを見ると、どうも予定と結果が大変に違う場合が多い。今、陸軍、海軍では先程も大臣、総長が云ったように本土決戦の準備をして居り、勝つ自信があると申しているが、自分はその点について心配している。先日参謀総長から九十九里浜の防備について話を聞いたが、実はその後侍従武官が実地に見て来ての話では、総長の話とは非常に違っていて、防備は殆ど出来ていないようである。又先日編成を終った或る師団の装備については、参謀総長から完了の旨の話を聞いたが、実は兵士に銃剣さえゆき渡っていない有様である事が判った。このような状態で本土決戦に突入したらどうなるか、自分は非常に心配である。

或は日本民族は皆死んでしまわなければならなくなるのではなからうかと思ふ。そうならたらどうしてこの日本という国を子孫に伝えることが出来るか。自分の任務は祖先から受けついでこの日本を子孫に伝えることである。今日となつては一人でも多くの日本人が生きて残つて、その人達が将来再び起ち上つて貰う外にこの日本を子孫に伝える方法はないと思ふ。それにこのまゝ戦いを続けることは世界人類にとつても不幸なことである。自分は明治天皇の三國干渉の時のお心持ちも考え、自分のことはどうなつてもかまわない。堪え難きこと、忍び難きことであるが、この戦争をやめる決心をした次才である。

陛下のお言葉は人々の号泣の中にとぎれと

ぎれに伺いました。日本国民と更に世界全人類の為に、自分のことはどうなつても構わないという陛下の宏大無辺なる御仁慈に対し、唯ひれ伏すのみでありました。

陛下のお言葉は更に続きまして、国民がよ

「平家物語」の物語 (二三)

知る人なし滝口入道の庵

滝口入道、三位の中將を見奉つて、こはうつつとおほえ候はぬものかな。八嶋よりこれまでは何としてのがれさせ給ひて候やらん、と申しければ、三位の中將宣ひけるは「さればこそ、人なみなみに都を出でて西国へ落ちくだりたりしかども、ふるさとにとどめおきしおさなき者共の恋しさ、いつ忘るべしとおほえねば……。」

悲恋の滝口入道が高野山に身をひそめ、仏道修業に専念していたある日、思いもかけぬ旅人が訪れた。家族への未練から、戦場を抜け出して来た平維盛だ。重景、石重丸、舎人武里ら腹心の家来が供をしている。かつては権盛ときめいた平家一門の中で、桜の花を頭にさして舞い「楊梅のようだ」とその美男ぶりを讃えられた維盛が、旅の疲れと苦惱で青黒くやせこけて一人哀れである。夜の高野山、薄暗い明かりの下に「京に残した妻子がただ恋しくて……」と維盛はうなだれる。

その夜滝口入道の庵で語り明かした維盛は、翌朝東禅院の上人を招いて出家することになった。「あゝ、出家前の姿をもう一度恋しい都の人達に見せたい」と、どこまでも未練な維盛。重景、石重丸も自分の手で髪を切り、武里も「屋島へ行け」という維盛の言葉を押し返した。主従はこうして山伏姿に身をやつし熊野の方へ落ちて行つた。

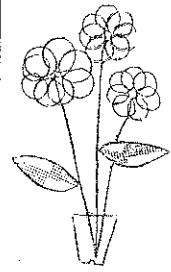
恋に破れた滝口と、肉親の情に悩む維盛。その出会いを明治の文豪高山樗牛は「滝口入道」の中でこう書いている。

柱にもたれ今昔の感慨にふけていた滝口は、小松内府重盛に幾度か云われた言葉を思い出して思わず居すまいを正した。「維盛は心弱き者、一朝事あらん時妻子の愛にひかされて未練の最期に一門の恥をさらすかも知れぬ、頼りに思ひはお前一人」だからこそ維盛が「先君も嘆かし不甲斐なき者よと思われる事だろ」と嘆息したとき、滝口は慰めの言

葉の代りにキツとして云った。「そうお考えならどうして落人になられた、屋島に引返し一門と運命を共になさい」と。面目なげにうなだれていた維盛は次の室に入る。あと見送って滝口入道はそのまゝガバと伏し、肩ふるわせ男泣きに泣き沈んだ。...

ケープルカーで高野山に登り滝口入道の庵があったという清浄心院谷と道一つ隔てて向い合った宝善院に一泊。平家物語時代には「都を去ること二百里、人里離れて青嵐梢を鳴らし夕日の光も静か、八葉の峰、八つの谷、まことに心も澄み渡る」という山深い仏教の聖地が、今は観光客のさわめきが表通りで夜中まで賑わっている。

翌朝清浄心院に滝口入道の庵跡を探し求めた。草葺きだったという庵は大正十二年暮れ火災で焼失し、今は清浄心院の庭になっていた。少し行くと大円院に着く、滝口入道の庵の前にあったという井戸がこゝに移されている。傍らの梅の木には、横笛の霊が霊となつて春になると毎年飛んで来て、悲恋の歌を囁くという寺伝がある。「今年もやがて鶯はやって来ます、そして変らぬ美しい声で鳴きますよ」藤田光憧住職はこう説明して呉れた。



古代史に於ける 日本建国の謎 (二)

弓削仁正

建国の謎の手懸り

それでは対外的にも又国内的にも、不完全ながら統一国家らしい主権を持った日本の建国はいつ頃なされたか。多くの学説では大体彌生時代から古墳時代の前期、紀元三百年から四百年の初め頃である、という説に異論はないようである。然し誰が建国の主であるか、日本を最初に造ったのは誰か、という事になると、是は又諸説紛々であるが、しかしながらこうした事実問題を推理一方で片づける訳にはゆかない。そこで日本で一番古い記録の「古事記」(七一二年編)と「日本書記」(七二〇年編)や、「出雲風土記」等に記してある建国物語神話を唯一の手懸りとしなけれ

王者の古墳を発掘する事が出来なかつたため日本は考古学の世界の水準に比べて大差劣っていた。又一つには考古学の調査には莫大な費用がかかる。でも今日迄相当の成果をあげて、例の「銅鐸」(どうたく)、「銅劍、銅鐸」(どうけん、どうぼく)の分布調査により、祭器として銅鐸を祭っていた民族が、銅劍や銅鐸を武器とする民族に征服されて、大和政権を奪われた事実を発見した。又中国史に見えるこの時代の記録によって逆に日本の姿を再発見する方法、即ち「漢書」の地理誌とか、有名な「魏誌」(倭人伝)或は「後漢書」(東夷伝)、又は朝鮮の「百濟記」等によって日本の記録である古事記や日本書記にも無い古い時代の日本を知る方法である。

耶馬台国と大和朝廷

耶馬台国が倭国に実在した事は既に誰人も疑い得ない事実であつて、そのことは魏誌倭人伝に刻明に記録されているが、それが何処に在ったかとなると徳川時代から今日迄、各学派が証拠を夫々提出して、九州だ、近畿大和だと争っている。では何故そんなに争うのか、九州が大和かという事がそれ程大切な事なの。在ったのだから何処でもよいのではなから、というところがゆかぬ。才一に耶馬台国が初めから大和に在ったのでは、神武天皇の出る幕が無くなる訳である。しかも耶馬台国の王は卑彌呼という女王で、二代目の王も台与という十三才で即位した女王である。

又、耶馬台国が最初から大和に在って、当時の支那の皇帝と交際があり、色々の品物や奴隸を中国皇帝に献じたり、先方の「金印」や「紫綬」を貰ったり、台与の時代には「黄龍」という中国の属国として「軍旗」を貰ったりした事実が先方の歴史書に載っているから、そうなるかと天孫ニギノミコトが雲の上から九州高千穂の峰に下りて来る訳にはいかず、大和の大峰山あたり以降下せぬと話が合わない。

死した事も記録されているが、その大きな墓塚も今日迄所在が判明しない、侵略者によって破壊されたものと思われる。卑彌呼が戦った狗奴国というのは肥後の旧名で「熊国」つまり現在の熊本県である。

たので、果たしてどちらが剣豪龍馬に初太刀をつけたかの二説の甲乙を今となっては決しがたい。どなたか確かな史実をご存じの方はお教え頂きたい。

足立声光氏の 逝去を悼む

長浜南城



この辺が日本建国の序幕のように思われる、耶馬台国が九州に在ったのか、大和か、大勢の学者達が論争するもの尤もで、元々耶馬台国の所在論は、魏誌倭人伝にある里程の計算、朝鮮からの距離、方向、日数などの違いから争われているのであるが、それは同時に大和朝廷による建国に影響する訳である。(未完)

先輩足立声光氏の逝去を知ったのは昨年暮である。長い間病床にあって養生に努められたが薬石効なく、心から哀悼の意を表する次第である。

では、耶馬台国が最初から九州に在ったとすれば理由が合いかというところ、これ又それは参らぬ。才一、耶馬台国が大和に東遷したという記録が中国にも日本にも無いのである。ましてや女王が大和王権を築いた事実もなく、大和の王権は強い男の王が築いたと古墳にも記録にもはっきり明示されている。耶馬台国という三十一ヶ国の連合国家が北九州に在り、同時期に大和に別個の大和國家が在ったとは解し難く、史実もそれを否定している。

京絃一月号に掲載の二橋凡羊氏執筆「龍馬を斬った男」は、新撰組の今井信郎だと書かれてはいるが、三十六年十月号京絃才一二四号から三回に亘り平井春嶺氏寄稿の「切抜帳から坂本龍馬の暗殺者」には、新撰組ではなく京都見廻り組の渡辺篤であるとして、当時の経緯につき可成り詳細に記されている。何分騒乱中の維新直前の事柄ゆえ何れが正か否か判断しないが、今井も渡辺も新撰組員ではなく、佐々木唯三郎の統率する京都見廻り組の組員であつたらしく、当夜龍馬の旅籠近江屋を襲った六人の隊士中に今井も渡辺も居る。

琵琶の絃に変化性を強く要望せられた結果故飯牟礼寿長翁の流れを汲む私の弾法が、多少でも音楽的である点に共鳴せられ、飯牟礼の流れを決して絶ゆることなく磨きあげること、何時も口ぐせの如く督励して下さった事は、長い正派の道を練成してこられた年輪

編集 部

「坂本竜馬を斬った男」

ふり、その墓は直徑百歩で多数の女奴隷が殉

を斬った男」は、新撰組の今井信郎だと書かれてはいるが、三十六年十月号京絃才一二四号から三回に亘り平井春嶺氏寄稿の「切抜帳から坂本龍馬の暗殺者」には、新撰組ではなく京都見廻り組の渡辺篤であるとして、当時の経緯につき可成り詳細に記されている。何分騒乱中の維新直前の事柄ゆえ何れが正か否か判断しないが、今井も渡辺も新撰組員ではなく、佐々木唯三郎の統率する京都見廻り組の組員であつたらしく、当夜龍馬の旅籠近江屋を襲った六人の隊士中に今井も渡辺も居る。

にあられる忠告であったと感謝している。足立声光氏は広島出身、その声量のゆたかにして絃又雄渾、若き日のその芸風は広島

の浅野侯を初め、全国到る処で感動を与えずにはいかなかった。斯かる実績があったので、一流の琵琶人の演奏についての批判も鋭かった。琵琶らしい音締め、淡々たる歌調等に一倍の批判が強かった。如何なる名人芸であっても、兎角無意識の欠陥がひそむものである。声光氏の感覚は、いち早く気づかれて細密にこの欠陥を正しく批判された。この種の真の批判家は今や琵琶界に影をひそめ、皆無という外はない。琵琶人としてこの事が一番哀しいことである。合掌

パトロンとスポンサー

突風

「今の芸人の不作法さは何と云うことだろう」と作家の小島政二郎が憤慨している。芸人は何のために救済で高座へあがるのか。お客を尊び、芸を尊ぶという心意を示すためだ。ところが風俗だけは昔の儘でも、今の芸人からその精神はもぬけの殻になっている。「実際、テレビに出てくる彼奴等の物の云い方は、あれは一体何だ、客に向って云う物の云い方か、無礼至極である(うえの10月号)」

原因は二つある。オ一はお客の質が低下したことである。昔は気むつかしい客がいて、喝采どころかクスリとも笑ってくれない。所謂「聞き巧者」の客がいなくなつて芸人の質も低下した。

原因のオ二はマスコミだ。「お金を呉れるのは放送局であつてお客ではない」。放送局には「拍手喝采係」がいてお客に合図する。これでは芸人が放送局の御機嫌を取結ぶのに専念して、お客をなすがしろにするのは当然だ、というのである。

芸(芸術)のあるところ、之を援護するパトロンがいたのは洋の東西、歴史の古今を問わない。だが、現代ではパトロンが消えてス

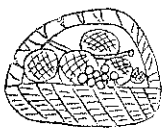
ポンサーが登場した。どちらも芸人(芸術家)の金主に違いないが、前者は自己の教養と趣味を誇示するため、少くとも芸の援護者として振舞った。後者は質より量、一人でも多くの大衆に自己宣伝することが唯一の目的だから、芸の質的内容には無関心だ。芸と芸人の水準低下は、パトロンと交替したスポンサーという存在について考えてみる必要がある。(明日新聞から)

滝原流石

京雄の眼もとに細くある微笑

納子雛眉目おほはれて微笑みぬ

人形の眼に溶けて澄む春灯



河瀬碩水氏

七回忌追悼演奏会

元錦心流一水会大阪支部長河瀬碩水氏が昭和三十八年二月二日急逝されて今年七回忌にあたるので、一水会大阪支部主催、神戸京都両支部後援の元に二月一日午後一時から大

阪曾根崎の大融寺会館に於て法要が営まれたあと追悼演奏会が、司会馬瀬滄水、庶務田中歎水両氏の円滑な運営によって開催され、京阪神の琵琶人二十数氏が生花と遺愛の琵琶一面が飾られた中の故人の温顔遺影の前で交々一曲づつ献奏し、その間故人録音のテープ傑作「本能寺」を公開して涙を新たにした。尚会場には河瀬未亡人、遺子や親戚の方々を始め故人生前の徳を慕って多数の各流派琵琶人や一般聴衆が来聴して満員の盛況を呈した。終演後別室で清盃を挙げながら故人の追憶談や芸談に花を咲かせて八時半滞りなく閉会された。(献奏者別項「よもやま」欄参照)



武絃会研修会 東京小金井の武絃会は一月及び新年宴会 十二日午後から伊藤馨水方琵琶堂に於て才68回研修会を開催し石童丸、吳

究静軒、菅公、加藤喜水、父乃木将軍、小嶺妃水、和歌朗詠、福島侯水、広瀬中佐、土田昇龍、関白秀次、伊藤馨水、吹雪の敵、高杉洲靖、月下の陣、佐藤時水、蓬菜山、大村鼓城、春の調べ、菊地甘水、鉢の木、清水源城、松崎、坂本錦道以上順演のあと新年宴会に移り九時和やかに閉会した。

大阪琵琶同好会 一月十二日午後一時よ

新年茶会

り奈良葛城郡志都美道場で開催。島津旭抱、秋口旭伝、松本旭勇、水谷旭甫、矢野旭信、西尾寿子、辻旭城、石橋旭嶺、下野旭明、秋田楓葉諸氏出席弾交して七時過ぎ盛會裡に終了した。

一水会大阪、神戸 一月十五日成人の日

両支部新年初謡会 両支部共備西宮市公民館に於て会員や同好者約三十名出席、馬瀬、蔵本両支部長の挨拶に続いて琵琶、詩吟を交互に熱演、又松野紫雲氏の諸葛孔明の事蹟に

関する造詣深い講演を聴いて一同啓蒙、引続き宴に移ってシャンパンで景気をつけ或は幸運の福引に興を添え、宴酣となるや粋を隠し芸など統出して彌が上にも新春気分横溢、時の経つのを忘れたが、漸く九時万歳を唱和して散会した。尚昨年半歳に亘つて闘病生活を送り美事に之を克服された蔵本司水氏が元気に本催しの采配に当られた事は何より嬉しく

今後一層自重の上今年の御活躍を期待する次第である(輸水記)

(演奏者) 長谷川憲扇、木村蓮水、蔵本司水、反町紫水、井上碧水、米沢卯水、杉秀夫、

吉山、吉田、重原、中西錦水、上田澄水、佐々木寒水、三浦蓮水、森慧、番匠清水、田中歎水、中山鳳水、尾山好水、三浦和子、和田、藤原英水、馬瀬滄水(敬称略)

京都琵琶協会 (1) 本年初の研究茶話会は

定例茶話会 一月十五日午後一時から千

本出水の徳雲寺で開催された。一兩日来寒気殊に厳しく小雪ちらつく中を集った会員は室内に装置された暖房設備で和やかなムードの裡に夕刻迄各一曲研究演奏のあと夕食を共にしながら来る二十五日大津の湖畔紅葉センターで新年宴会を催す件や今年の行事などを話し合つて八時半散会した。

出席者 伊吹正陽、田中鵬水、中島旭穂、中島真水、梅原旭満、矢吹華水、古谷寛水、木村維水、平井春嶺、植村寛水(敬称略)

(2) 二月の研究茶話会は二日(日)午後から徳雲寺で開催、両三日来降りみ降らずみの水雨漸く回復と共に寒気加わる中を伊吹、田中、中島旭、中島真、梅原、古谷、小林、木村、平井、植村、福井吉野諸氏出席、例の通り各自熱演後食事を摂りながら三月下旬和歌山白浜温泉へ二泊演奏旅行、六月一日恒例春の演奏会開催などの協議をして七時解散した。

京都琵琶協会 時機的に少々おくれたが新年懇親会 一月二十五日(土)午後から会員戸倉旭嶺さんの幹旋で大津市郊外の琵琶湖温泉紅葉バラダイス三階広間に於て新年懇親会が開催された。生憎朝来の水雨に加えて風邪などのため二、三会員の欠席があつて残念だったが四明会の長老栗本天芳氏の臨席もあり各員の熱演を欣賞し入浴後名物の鴨料理で清盃を酌み交し八時半なごやかに散会した。(出席者) 平井春嶺、木村維水、小林旭光、矢吹華水、中島旭穂、田中鵬水、若宮旭登、